慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	牧野信也君学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.1 (1969. 8) ,p.129- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690800-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙　報

牧野信也君学位請求論文審査要旨

主論文　創造と終末
—コーラン的世界像の構造—

副論文　Zum Semantischen Aufbau der Neuarabischen Verben.

イスラム教の聖典コーランは昔から神学的・解釈学的・文献学的・言語学的等、種々の立場から研究の対象となって、多くの人々が様々の見地から研究を行って来た。しかし著者は、従来の諸研究とは異った角度からこの書を見るための方法や、問題の立て方について思索を重ねた結果、つぎの如き問題を設定し得たと言っている。

すなわち、コーランは予言者マホメットを通じて与えられた神の啓示の記録とされているが、イスラム教と密接な関係を持つ古代ヘブライの予言者達の場合と比較するに、後者は何よりも先ず、世の終りとしての終末を明確に意識し、世の始め、乃至は天地・人間の創造については稀にしか言及していない。また創造について述べるにしても、あくまでも終末との類比に於いてしている。コーランに於いても、終末は重大な事柄として繰返し強調して述べられてはいるが、創造に関しても終末と同様に大きな力点をかけて述べられている。この点は旧約の予言書の場合と著しい対照を示している。それならば、コーランにおいても創造は終末の類比として考えられているのであるか。またコーランでは創造と終末とは、果して如何なる関係に立つのであろうか。これらの点を明かにするのが本論文の最終目的であると言っている。

研究の過程として、創造及び終末はそれぞれ、コーランに於て、如何なる構造をもっているかを種々の角度から見ていくのであるが、そのために著者の取った立場は、一般に民衆の世界像は、その言語、ことにそれを構成する文化的に重要な語彙の構造に如実に反映しているという意味論上の根本的立場である。このためにまずコーランに現われている創造および終末をめぐる多くの主要語の内容を分析しつつ考察を進めていき、これを軸として、コーランの持っている世界像の構造を明かにしようと努めたのである。

全編の構成を見るに、まず創造論に最初の四章を、ついで終末論につぎの五章を割いているのであるが、そのあとの最後の一章において、創造と終末との関係を全体的に考えて結論を下している。

一、創造論。これは第一章「創造の空間的構造」、第二章「創造の時間的構造」、第三章「言葉による創造」、第四章「無からの創造」という順になっている。

まず第一章で、天地創造に関する主要語　Key terms　二十

二と人間創造に関する主要語二十一を挙げ、その意味を論じている。このように天地乃至大自然の創造と人間をはじめとする生物の創造との二つに分けることは、コーラン全体を流れる創造思想と合致し、また研究の有効な観点であると考えたと断っている。こうして考察した結果、コーランに於ては、神はまず建物のドームの如く天をうち建て、これを七重に区分し、それらに天体を配置して、それぞれの役割を定め、秩序を与えたのち、敷物の如く大地を拡げて平らかにして、大きなうつわの如くし、山をもって固定したものと説いているのであり、天も地も無からの創造ではなく、既存のものを空間的に位置付け、役割を定め、秩序を立てたと考えていると論じている。

また人間の創造については、塵、または土などから造り、これに息を吹きこんだもの。つまり人間の肉体とは無関係な素材からつくられたものとしている一方では、卑しい水（精液）、凝血、肉塊、骨という経過を辿って形成されたものともしていて、天地の創造の場合とは異なり一定の段階を踏んだ質的変化の相において考えていることがわかると説いている。

第二章は副題を「創造と歴史」としているが、神は天地を創造したのみでなく、これを保持し、支配し、統制するものであるとの考えが、コーランに見えているし、また、人間やジン（妖精）を創造したうえ、養育し、指導し、その一人びとりを監視するものであると説いている。後世の人間の誕生も、そもそもの創造の連続であるとの見解からすれば、創造は歴史に連なるものであると言えるのである。また原始における創造は、それ自体で完結し、完全なものであるが、もし神の意志が働くならば創造は歴史の中で反覆されるものである。人間の場合、創造の反覆とは世代の交替を意味するとともに、死者を復活さすことをも指していると論じている。

第三章の言葉による創造とは、旧約聖書創世記の創世譚における如く、神がひとたび「光あれ」と言葉をかけると光が生じたという如きものである。コーランでは、これが更に単純化されている。すなわち「あれ」kun の一語により天地も人間も存在したと説かれているのである。

以上、第一章から述べられている如く、コーラン中には説明的、分析的、具体的な創造観もあるし、抽象的、包括的な創造観も現われている。これは何故であろうか。コーラン中に含まれた啓示は初期のもの、中期のもの、後期のものと三群に大別することが出来るので、この時期の変化につれて創造観も変化したのであろうかという疑問も持たれる。しかし、よく検討して行くと説明的・具体的な創造観は右三時期を通じて、しばしば現われ、抽象的・包括的な言葉による創造という考方も、回数こそ少かれ、やはり三時期を通じて現われている。

要するに前者は神が自然及び人間の側に立ち、そこに内在しつつ創造するが如く説いたもの、後者は神が自然や人間を超越した存在として創造する如く説いたものである。

第四章は、無よりの創造か、有よりの創造かということについ

ての考察である。このことはイスラム神学において重大な問題として論議されて来たのであるが、著者の見解によれば、コーランでは天地も生物もみな既にあつた何かに秩序をつけることによつて造られたものであるという。ただ第十九章（九―一〇節、六七―六八節）第五十二章（三三―三六節）と三個所に無から人間が造られたと訳されて来た個所があるが、よく検討すれば、真の無ではなく、人間の形をしていないものの意味に解すべきである。

二、終末論。これは第一章「終末の情景」、第二章「裁きの構造」、第三章「報いの構造」、第四章「終末と時間」、第五章「終末と信仰」という順になつている。

第一章では、終末の構造について、コーランでは、天地・自然の終末と、人間の終末とに二大別し、それぞれに種々の角度から照明を当てているとしている。まず終末の前についてであるが、具体的な表現は見当らぬ。終末が来ると、天は揺れ裂け、崩れ落ち、日も月も光を失い、星は四散し、大地は粉砕され、山は動き潰れ、海が注ぎこんでくるといわれ、創造の時にたてられた空間的秩序の崩壊という形で示されている。

そのとき人間は物質的面では、墓から引出され、神のもとに集められ、枯骨に化したものが、もとの肉体の姿に戻される。精神的面では、現世において結ばれたすべての結縁から切り離されるが、これは他の人たちとのみでなく、自分の舌や手足などとも結びつきを失つて裁きの場に出されるのである。

第二章の「裁きの構成」においては、コーランの中の言葉から、如何ようの裁きが行われるかということを解析してある。神のもとにある正確な記録が示され、訊問、天使または特定の人間の証言や執成し、公平な判決などを経て、すべての人間が天国行きと地獄行きとにふり分けられる過程を述べてある。

第三章「報いの構造」に於ては、最後の裁きに於いて人間はすべて現世に於ける一切の相互関係から完全に解き放たれた個々の存在して報いを受けるもので、誰も不当な扱いをされることなく、他人の罪を負わされることがないという教が説かれていることを明かにしている。善行に対しては、最善の行為を標準として報われるが、この報いはすべて神の慈悲によるもので、報賞の率は二倍から十倍、あるいは七百倍にもあたると説かれている。悪行に対しては、一に対し一の割合で罰せられるが、すべての悪事は必ずこれを行つた者にかえつてくるという考え方が示されていると述べてある。

第四章「終末と時間」は終末そのものの時間的構造についての考察である。それがいつ来るかは神のみの知ることであるが「すぐ近くである」「刻々と近づきつつある」という考え方が示されている。有限な人間の時間と、無限な神の時間との接点が終末であり、終末の時点から現世を振返つて見ると、長い年月がきわめて短かく感ぜられるものであるということが示されている。これは神の時間での一日は、人間の場合における千年ないし五万年にも当るためであるという。

第五章「終末と信仰」においては終末についての「信じ」「望

み」「恐れ」その他の感情に関し、コーランに現われているもろもろの言葉のニュアンスの考察が述べてある。その結果として、終末の事態は、人間理性の立場から客観的に理解することは出来ず、人間が神に対して抱く信仰の立場から主観的に把握されるものであると述べている。

最後の章「創造と終末」において、この二つには鋭い対立があるとし、いくつかの具体的の例をあげている。例えば創造のときの「播き散らす」という概念は終末の場合の「集める」という概念と対比され、創造は神兆であるに対し、終末は神の約束であり、創造は理性の働きによって理解できるが、終末の約束は信仰の立場からのみ把握されるとしている。

しかしまた両者は相互に関連し、密接に結びついてもいるとし、創造と終末との共通性を説いている。たとえば、両者ともアッラーを他の神々や偶像から区別する標準として考えられており、このことにより創造と終末とは、結びつけられている。また世界の終末に至る期間は、万物の創造のときすでに決められたものであるが、この点でも創造と終末とは結びついている。さらに最後の審判における個々の所業に対する報いは、創造の目的の一つと考えられているが、この点にも両者の結びつきが見られると論じている。

要するに、コーランに於ては終末が終始一貫して創造の類比として考えられているのであるが、このことはヘブライの予言者達に於いては創造が終末の類比としてとらえられているのと異なる点である。

コーランは宗教的重要性の故に、無数の研究の対象として取り上げられて来た。しかし本当の意味において近代的、否、現代的な学的観点からなされた研究は意外に少ない。西欧においてすら、コーランの研究は大部分、文献学的、歴史的、解釈学的なものであって、その研究精神は概して十九世紀的である。

この意味において、本研究は極めてユニークなものである。現代の人文科学の傾向を特徴づけるものの一つが言語の思惟及び世界像の形成に対する強大な影響力への関心であることは周知の事実であるが、本研究はかかる二十世紀的傾向に乗った全く新しいコーランの分析というべきである。

民族の或る時代における世界像は、その民族のサンクロニック（共時態）な状態、特に文化的価値の最高のものを代表する所謂「主要語」Key terms の体系の示す構造に如実に反映するという現代意味論の根本的テーゼの一つに此の研究はその理論的、方法論的基礎を持っている。かかる意味で本論の如く確固たる方法論的基礎付けをもつコーランの研究は他に殆ど例を見ないと考えられる。

本論文はコーランの世界像の構成領域のうち、特に旧約聖書との対比において比類なき重要性をもつところの「創造」と「終末」、すなわち神の無始なる過去における世界創造と、末来の果てにおこるべき世界の終末とを中心的課題として取り上げ、これら二つの相互に相対峙し、相聯関するところの神学的領域におい

てコーランが使用する「主要語」を微細にわたつて取り出し、それらが互にからみ合つて形成する意味論的網の目を分析し、それによつてそれらの「主要語」の背後に伏在する創造と終末の諸概念の構造を考究し、更に進んで、かかる分析的操作に基礎付けられて、コーランが創造と終末に関していかなる思想を、いかなる形で展開しているかを考究したものである。

取扱われた主題の思想史的、文化史的重要性、確実な方法論的原理、研究そのものの現代的な立場等がこの研究を極めて独創的なものとしている。

全篇を通観するに、古代ヘブライの予言者たちの世界創造観、終末観などとの比較がやや簡略に過ぎたのではないかと思われる。また従来のイスラム神学者たちのこの方面についての見解なども、もつと詳しく紹介したならば著者の独創の意見が一層明確に表現されたのではないかと惜しまれる。しかし、これらの点も、決して著者が右の如き方面に対する研究を等閑視したことを意味するものでないことは、この論文の行間から充分に窺うことが出来るのである。

右の如き理由から著者牧野信也君は文学博士の学位を受ける資格あるものと考えられる。

昭和四十四年二月十日

主査　慶応義塾大学教授　文学博士　前嶋信次
副査　慶応義塾大学教授　文学博士　井筒俊彦
同　慶応義塾大学教授　ドクトゥール・エス・レットル　松本信広

彙報

三田史学会例会

昭和四十四年五月二十一日　於三田西校舎五一七番教室

新入生歓迎会

講演

タイの史跡　西岡秀雄氏

東洋史談話会

昭和四十四年五月二日　於学生食堂南カーテンルーム

新入生歓迎会

昭和四十四年五月二十九・三十日

春季旅行　伊豆・韮山郷土史料館見学、吉奈温泉・堂ケ島方面

昭和四十四年六月二十五日　於西校舎五一三番教室

研究発表

香港の農村と漁村　可児弘明氏